



マンダール人，インドネシア人，中国人，日本人

古川久雄*

「南スラウェシの様々な漁村を見られたようですね。生態環境と漁の技術を統合的に見る視点は大変面白い。しかし、漁村ではとり分け、親分—子分関係が強くて、漁民は貧しいし、貧しいだけじゃなくて、子供達も気がねで、通学がままならない現実がある。やはり、研究の目的は漁業技術の近代化、生活レベルの向上におくべきだと思う」。発言者はハサヌディン大学で海洋生物学の講師をしているモカ氏である。3週間ばかりの雑多な見聞を強引にまとめて、この海域の漁撈の生態的分類を述べ、更に、漁師、船大工、海運業者、海産物業者、水産会社などの共生のネットワークを手短かに話した私へのコメントである。

この種のコメントが出ることは私も勿論予想していた。旅行に同行したハムカやアンサール（共に人類学の若い講師）と似た議論を何回かやっている。その時の意見をくり返してもいいのだが、若い彼等を相手にすると、教授達も居並ぶ会議では、発言を少し工夫せねば、と言いつつ内には、バウバウ（ブトン島の町）の夜景を思いおこした。かっこ良いことを言うなという気持ちが、胸底にたまった不満のおりをかき上げたのだ。

真珠養殖の日本人に会いに行った時のことだ。ハムカ、アンサールと海岸通りの露店で晩飯を食った。出てきた焼魚の半身は食ったのだが、他の半身をひっくり返して一口食った私は言った。「ウー、これは半分腐っている」。一口食ったアンサールも「ウーン、豆腐みたいや。食わんほうが安全やな。片身しか氷にふれてなかったな」。

何せ、鮮度を保つという感覚が全くない。スラヤール島の生簀でもらったスヌ（ハタの類）の末期がいい例だ。香港から来る生魚運搬船に備えて、現地の華僑が海中に生簀を作っている。それを見に行った時、番人が45cm程のハタを1匹土産にくれた。頭にコツンと棍棒をくわわして、エラにテグスを通した船頭は、カンカン照りの甲板の上に、ハタを放り出した。ハタは30分程、大きく口

を開き、エラを膨らませて、それでもバタバタとはねていた。やがて黄色い水便を排泄孔からピューッと飛ばしてコト切れてしまった。どうせ死ぬのだし、その日の内に料理するのだから、どこに置こうと大差ないと言えばそれまでだが、少し日陰に置くとか、バケツで生かしたまま運ぶこともできない相談ではない。私は思った。この感覚が瀟灑しているこの素朴世界で、香港向け生魚運搬という事業をやっている中国人は偉大なる中国文明の伝導者だ。文明を闇に向かって照射するようなものだ。中国文明を評価するかどうかは措くとしても、この華僑達が相当数の漁民を潤していることは事実だ。その関係は責めるべきものなのだろうか。

モカ氏に答えようとして、また考えが飛んだ。職人道はどうなるのだろうか。真珠作りの日本人のことだ。バウバウの腐った焼魚を放り出して、スピードボートで、ブラウ・マカッサルに向った。満月の光で夜の海を走る。真珠会社の建物が見え始めたかと思うと、闇を切り裂くようなサーチライトが海を照らし出した。スピードボートにびったりと狙いをつけて、海上の衛所から鋭い監視の目が光っている。間もなく、会社の棧橋に着き、白蝶貝を入れる網箱を見乍ら、寮の食堂に上がりこんだ。そこで会った真珠作りの平賀さんは先志摩半島の出身である。満月のような丸顔にニコニコした表情が絶えない。人柄がそのまま出ている。今晚は、突然お邪魔しますとあいさつすると、「カメヘン、カメヘン。酒が無うてな、まあコーラでも飲んで」。

平賀さんは親の代からの真珠作りである。子供の時から仕事を見て育ったという。中学卒業後、自分もすぐ真珠作りの道に入り、1976年にアルのドボにあったアラフラ真珠会社に11年、バウバウに移って7年だという。「この海はへたらんや。餌まくからな、普通は海が汚れて来るんやけど、ここは潮の流れが早くて掃除ができるんやな。入って来る川が適当に養分もって来て、貝がよう育つ。エエ珠ができるんや」。私は小浜湾の真珠作

* Hisao Furukawa, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

りを思い出した。8mm 位のものが普通だと聞いていた。どんな真珠ができるのかたずねてみた。「見せよか」。平賀さんはヒョイと立ち上がって姿を消したかと思うと、すぐ大きな白蝶貝の殻と、大きな真珠1個をもって現われた。「16mm あるんや」。8mm の核を入れて2年たらずで成長するという。核入れ前後の養生に気を使うが、「生き物相手は面白い仕事や、こういうのができるから嬉しいよ。しかし仲々満足のいくものはできん、33年珠作り一筋やけど、まだ小学生やわな」。

私はいささか誇らしい気分でハムカとアンサーの反応を見ていた。職人道の精華を見せる話である。しかし、平賀さんの職人道がふたりに伝わったかどうか心許ない。というのは、返ってきた質問が、その真珠はいくらですかということに絞られていた。

クーラーの利いてきた教室で、言い淀んだ挙句、モカ氏には、ランガ（ピンラン県）の漁村で会った漁師の話をした。そこはマンダールの漁師達が移住して来て、吹きさらしの砂浜に家を立ち並べた、すさまじい感じのする村だ。漁撈は東カリマントンの境の海で、そこへ軽快なくり船構造船の両側にフロートをつけたアウトリigger船で行く。トビ魚漁には網を使うが、大型の回遊魚は専ら夜釣りだという。小魚を餌にして、ハタやカツオを釣り糸でたぐりよせる。その時、妻も子供も、アバラ屋のことも、金づまりのことも、すべて忘れる。たぐり寄せる時に、ランプが倒れて船火事の危険が迫っても、横目でにらみ乍ら、一寸待てよ、今、手が離せないからなと、必死にテグスをたぐるといふ。

「モカさん、日本の漁師も昔は危険を承知で荒海へ漁に出るのが普通でした。最近は大敷網を仕かけて、湾内の生簀に魚を移し、必要な時にチョコッと一走りで魚をもって来る。漁師もまるで町の勤め人のようになっています。かつてのハイ・

スピリッツは失われてしまったようです。安全で快適な生活になったかもしれないけれど、幸せになったのか、豊かになったのかは判りません。マンダールの漁師達はハイ・スピリッツに溢れて、幸せじゃないでしょうか。それなのに、君等は貧しい、貧しいのは不幸だから豊かになる必要がある、パトロン達に搾取されない仕組みを考え、遅れた漁法を近代化しなければならないといて、無理にロウ・スピリッツに追いこむ考えは適切でしょうか」。

漁師魂をロウ・スピリッツに追いこんで、閉塞された不満をカタストロフィックに噴出させる時だけ元気になる、そういう状況はこの海域に異質な考えじゃないか、ヨーロッパで、ロシアで起こっている悲劇じゃないかと言いたかった。

マレー多島海を舞台に多様な民族が共生することの世界で生きている哲学は随分上等なものじゃないかと言いたかった。その生活を遅れていると言って、機械仕かけの人工的な枠に人間をはめこもうとする勢力に加担するのですかと言いたかった。

しかし、こんなことは5分や10分喋って通じるものではない。1カ月近く一緒に旅行したアンサーやハムカとだって、彼等の言い分を、教科書の口移しはやめてくれと思ってこちらは聞いているし、彼等もハイ教授と言って相づちを打つけれど、金持国の人間にこの気持ちは所詮判らんと思って聞いているかもしれない。

遅れて入ってきたマツラダさんが、パトロン・クライアント関係についての分類の議論を始めた。一区切りつけようと、教室の冷気を胸に吸いこむと、胸の中に湿った空気が流れこんで来た。皆共通の空気を吸っているのだが、マツラダさんの声が遠くの蜂のうなりのように聞こえるだけだった。

(京都大学東南アジア研究センター教授)